

現代社会における技術と人間のあり方
—脳死・臓器移植医療および尊厳死を事例として—

外村 江里奈

早稲田大学院社会科学研究所

はじめに

本報告では、われわれの認識や思考形態や社会のあり方を根底から規定する技術を反省的に考察する。とくに自然と技術という根本概念をつうじて、われわれの思惟の限界と可能性を明らかにしたハイデガーによりながら、技術と人間知性の関係性を考察する。ゆえに本報告においては、個々の科学技術の是非については論じない。

科学技術の発展にともなって発生する問題は、技術と人間の関係性の密接さと科学技術の複雑性・多様性ゆえに、覆い隠される傾向にある。たしかに今日、われわれの生活は科学技術の恩恵なしでは成立しないほど、あらゆる領域において技術が浸透している。一方、科学技術の多くは過度に専門分化しているため、一般の利用者にとって複雑多岐な技術の内部構造や中間プロセスは理解しがたい。

それゆえ、科学技術がわれわれの生に与える影響や人間と技術の関係性について、あらためて問い直されることはあまりない。とりわけ臓器移植医療や生殖技術など、われわれの生命に直接かかわるような生命科学や医療技術の発展は、生の可能性を拡大し、命を救うゆえ積極的にすすめられる。だが、こうした医療技術の過度な発展は、人間の尊厳やさらに生命や自然に対する畏怖の念をゆるがす。なぜなら誕生や死が技術によって制御され、「生命の本質」を失うという危機をもたらすからである。

すなわち技術の使用においては、事後的な単なる反省ではなく、哲学的思考にもとづく反省が不可欠である。それは、単純に道具や機械の使用の是非についてというよりむしろ、社会のあり方や人間と技術とのかかわり方自体を問うことである。さらには自然の一部である人間が、自然とともに世界を形成する際のあり方そのものを考察することである。

1 技術の本質—「テクネー」と近代科学技術の相違

ハイデガーによると、「テクネー」は思惟と制作の全過程にかかわる「真理認識の様態」であり、技術の本質は決して技術的なものではない。このようにハイデガーが技術を問う場合、常に古代ギリシャにおける「テクネー」に遡る。人間の知の形態において、「テクネー」はもっとも身近な様態であると同時に、高次の様態に通じる特性をもつ。要するに「テクネー」の語意には、単に手仕事の行為や技能のみではなく、高度な芸術や美術をも含まれる。

ハイデガーのこうした技術のとらえ方に対して、ヤスパース(1964)は「技術の中立性」を

強調する。たしかにヤスパースが指摘するように、あらゆるものが機械化されることによって算定可能性や確実性が絶対的に優位になり、有用性・有益性のもとで存在の価値が決まるといえる。さらに技術システムの効率性を追求するべく、人間自体も有用に使い回され、単なる手段と位置づけられる。

ヤスパースによると、こうした手段の目的化が起き、人間性の隠蔽が促進される「技術の魔性」が現われるため、技術には人間の指導が必要であるという。このような技術の性質こそが、技術の限界であり、技術の価値は人間の使用如何に左右されるという。

しかしハイデガーによると、上述の限界は、技術ではなく人間理性の限界である。一般にわれわれは、技術を目的を達成するための単なる手段にすぎないととらえ、目的—手段関係をつうじて理解する。こうした通常の技術理解に対して、ハイデガーは近代技術の本質を「工作機構(Machenschaft)」にもとづいた「集立態(Ge-stell)」という独自の表現を用いてとらえる。

ただし、「集立態」は近代技術のみならず、あらゆる技術の本質である。すでに古代ギリシャの自然理解のうちにポイエーシスという「制作」の働きがあることからわかるように、人間は「作る—作られる」という「工作機構」に規定されて真理とかかわっている。つまり、人間自身も「集立態」の枠組みに組み込まれている。しかし、とくに近代に入り、われわれの思考形態のなかで合理的な要素が強まり、「表象定立」や「用象定立」の働きによって「工作機構」の支配が強まる。それゆえ、近代技術においてはすべての存在(物)が、あたかも人間の支配の対象となり得るかのようになり、「作られたもの」となり、もしくは「作られ得るもの」となるという(秋富,2006:185)。

2 技術の両義性と人間存在の危機

ハイデガーにおいては、技術社会化の問題点である「科学技術の支配性と自己目的化」および「科学技術における合理的・科学的な認識の重視および認識の貧困化」についても、上述の観点から検討される。

すなわち「テクネー」としての技術は、知の一つの種類であり、「真理認識の—様態」であるため、技術は一方で真理の本質と関係し人間性を高める。他方で、技術の特性である「挑発(Herausfordern)」の激しさゆえ、技術の絶えざる用立てのなかで自らの由来や本質を忘却で追い立てる。人間が技術をつうじて真理を開示することにおいて、「危険(Gefahr)」性があらかじめ内包されているということである。したがって技術の「挑発」が、他のすべての可能性を立て塞ぎ、われわれに真理の本質を見失わせるという。

以上の考察からとくに以下の二点が明らかになる。第一に、技術は「目的のための手段であり、人間の行為である」という通常の技術理解や、人間の用い方次第で価値が決まるとされる「技術の中立性」では、技術の本質はとらえられないということである。第二に、技術の「危険」性は、技術の所産が自然や文化を破壊し、人間を破滅に導くという点にあ

るのではないことである。

つまり技術における「危険」は、絶え間ない技術発展の理論のなかで、われわれの思考のあり方が制限されることである。また、技術の本質に対していかなる思惟もしないことである。それは人間存在の危機であり、「存在」の真理を問うていないことに直結している。

3 「テクネー」の可能性と行為としての技術

ここでは、これまでのハイデガーの思想を援用し、「脳死・臓器移植医療」や「尊厳死」における技術について考察する。これまでの考察から、技術と人間の関係性においては、主体は人間ではなく技術の側にあることが明らかになる。ゆえにわれわれが一度、技術発展の論理の連鎖に取り込まれると、そこから抜け出すことは困難である。

こうした点は、技術の発展における要求や目的の変化が、新たな技術手段の要求をも生み出すことから理解できる。それは、今日の原子力発電をめぐる問題や、生命倫理を揺るがすほど急速に進められる医療技術の発展に象徴されている。たとえば、臓器移植医療の増加にともなって「脳死」という新たな「死の規定」が積極的に採用されるようになった。あるいは人工呼吸器などを用いず、自然な死を迎えたいという要求が強まり、医療技術の過度な進歩に適用させようと「尊厳死」が生まれた。しかし、現在ほとりわけ移植先進諸国において、臓器不足を解消するために「尊厳死」を望む人からも臓器摘出がなされる場合も増えている。

けれども技術における問題は、一層の技術的な進歩によって解決されえない。なぜなら本来、「真理認識の一樣態」である技術は、絶えずわれわれ自身の内へかえり、自然や世界とのかかわり方を形成するものであるからである。さらにハイデガーの思想を援用すると技術を用いる際は、すでにわれわれは「危険」とともにある。したがって、一見すると有用である技術や命を救うために用いられる技術に対しても、技術が及ぼす影響をいかに広く深く検討しても慎重すぎるということはない。

すなわち技術の使用が意味するところは、われわれの思惟習慣として沈殿しながらも、技術と人間の社会の形成が同時になされているというわれわれの責任の重さである。たしかに技術はわれわれの行為に新しい可能性をもたらす。また、技術における人間の活動の拡大が、われわれの生活や生命に質的な意味の変化をもたらす。

したがって技術の使用によって変化するわれわれの生活や生命における意味を指摘し、自然や技術とともにわれわれの社会を形成してゆくことこそが「テクネー」である。

むすびにかえて

本報告は、ハイデガーの思想によりながら、「テクネー」と近代科学技術の相違を明らかにし、近代主体の概念から派生する認識という視点から技術をとらえた。技術の発展にもなう問題を通して、人間存在のあり方が問われているのは、第一に、近代特有の思考枠

組が、それまでの自然観や人間観を変化させ、それとともに技術を変質させてきたからである。第二に、技術はわれわれの知の形態を率直に示す行為の形であるからである。「作り得るもの」だからといってあらゆる発展をすすめるのではなく、われわれは自然にもとづいた認識や判断によって、その度、技術の使用と人間のあり方について模索する必要があるろう。

よって今後の課題として、現代の医療技術に関しても、認識や思考の転換が可能になる場や技術と人間のあり方についての議論がなされるような場を充実させるための考察を深めていきたい。

参考文献

- 秋富克哉(2006)「最後の神—『芸術と技術からの遠望』」ハイデッガー研究会編『ハイデッガーと思索の将来—哲学への〈寄与〉』理想社 pp.181-199
- 重田英世訳(1964)『歴史の起源と目標 ヤスパーズ選集 9』理想社
- Heidegger M., 1989, *Beitrage zur Phiosophie(Vom Ereignis)*, Martin Heidegger *Gesamtausgabe*, Band 65, Frankfurt am Main. 大橋良介、秋富克哉、ハルトムート・ブッナー訳(2005)『哲学への寄与論稿・ハイデッガー全集第 65 巻』創文社
- , 1962, *Die Technik und die Kehre.*, 小島威彦, アルムブルスター訳(1965)『技術論』理想社
- , 1950, *Die Zeit des Weltbildes*, V.Klostermann. 桑木務訳(1962)『世界像の時代』理想社